The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	刀工・一文字則宗の作風について ： 藤末鎌初の諸刀派の作例と比較から
Author(s)	
Citation	令和5（2023）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2024
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95150
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　　文学部　採択番号　No.　文 06

令和５年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふ　り　が　な 氏　　名	さいとう　ふうはく 齋藤　風伯	学部 学科	文学部 人文学科	学年	3 年
ふりがな 共　同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	門脇　むつみ	所属	人文学研究科		
研究課題名	刀工・一文字則宗の作風について～藤末鎌初の諸刀派の作例と比較から～				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

【研究目的】

本研究は、現存作例の比較から刀工・一文字則宗の作風を整理し、個の作例の分析に留まらない則宗という刀工の理解を深めることを目的とする。

さらに年代の近い周辺作例との比較から、その作風形成の過程についても論じることを目指す。

【研究方法】

研究の手法としては「現存作例の実見調査」「先行研究の整理」「各作品の作風分析、相互比較」の 3 つを軸に進める。それぞれの具体的内容は申請書で触れているため割愛する。

【研究経過】

今回、山口県下関市の忌宮神社が所蔵する作例、重要文化財　刀　無銘（伝則宗）について、特別拝観の機会をいただき、手に取っての熟覧、法量の計測、写真の撮影、乾拓の採取ができた。その結果、この作例が後述する則宗の作風範囲から大幅に外れる作風を示しており、則宗の手になる作ではないとの考えに至ったため、急遽この作例の作者について検討も行うこととした。また、先行研究の整理の結果、則宗という刀工についての前提部分に関しても見直しが必要であることが判明したため、計画書時点で中心に据えていた周辺刀工との比較に関しては十分な検討ができたとは言いがたく、その前段階となる則宗の作風の分析までの報告となることをお断りしたい。

【研究成果】

・先行研究の整理

可能な範囲で書籍の収集、参照を行ったが、研究計画書時点での「管見の限り、則宗に関する研究は展覧会図録等における各現存作例の解説や、一文字派全体に関する論考の中での言及に留まっており、作刀技術の習学過程、他の刀工との交流関係などをはじめ不明な点が多い。」との評価に変化はなかった。以下に個別の作例ではなく則宗という刀工単位での作風について言及した文章で特に重要な

ものを引用する。(傍線部は筆者による)

『日本古刀史』　本間順治氏著　頁七四

（前略）*各時代一文字の作風を見るに、まず則宗を始とする初期一文字は、姿も地もほぼ古備前同様で、即ち太刀姿が細身・小鋒多く、腰反高く踏張つき、小乱或は小乱に小丁子交る刃文を焼き、地刃沸ずくものであるが、まま古備前よりも丁子の目立つ整つた刃文があり、就中、則宗には沸出来の美しい小丁子乱がある。*（後略）

『華やかな日本刀　備前一文字』　廣井雄一氏著　　頁十

（前略）*則宗　『元亀元年刀剱目利書』(以下『元亀本』とする)、『新刊秘伝抄』、『古今銘盡』などの諸本は福岡一文字の元祖を定則とし、その子則宗の時代から一派は発展した。定則の現存するものは未見で、現存するものは則宗からであることから、今日では則宗を実質上、一派の祖としている。則宗は後鳥羽院番治の一人として著名な刀工で、その子に助宗、安則などがいた。則宗の在銘作は少なく日枝神社（国宝）と御物の太刀が昔から知られ、他に土屋家、島津家伝来の太刀が知られている。いずれも一文字の中では最も品格が高く、姿は細身、小鋒で腰反り高く踏張りがあり、鍛えは小板目がつみ、地沸つき、地斑交じり、乱映りが立つ。刃文は直刃調に小丁子を主に小乱交じり、小沸がついて見事であり、特に日枝神社の太刀が優れている。*（後略）

『日本刀大鑑　古刀編二』　本間順治氏、佐藤貫一氏監修　　頁八

（前略）*福岡一文字　この派で最も著名であり、古いとされている則宗（元暦頃)、助宗（承元頃)、その他経眼した安則、尚宗、成宗、助成、助則、貞真等にみる鎌倉初期のこの派の作風は古備前物に近接し、それに比較してやや技巧的となり、小丁子が目立った小乱があり、次代鎌倉中期の一派の三傑ともいうべき吉房（建保頃)、則房（片山一文字)、助真（鎌倉一文字）等の刃文はさらに技巧的となり、大丁子乱が絢爛としている。*（後略）

『日本名刀大図鑑』　佐藤寒山（貫一）氏著　　頁七十八

(前略)*則宗は鎌倉初期の備前国の名工で、福岡一文字派の祖と称せられる。古来、後鳥羽院番鍛冶の一人として名高い。則宗の作風は、鎌倉中期に栄えた同派の豪華絢爛たるものにくらべては、極めて地味であり、むしろ古備前派の作風に近く、ただ古備前物に比して、映りが盛んであり、丁子の刃文が一段と目立つもの*である。*則宗有銘、確実な作刀は極めて少いが、*(中略)*因みに巷間に則宗は菊一文字と称し、茎に菊花紋をほり、更に一文字をきるもののように伝えられているが、これは非常な誤りで、則宗二字銘のもの以外にはなく、また華やかな出来のものは皆無であることを銘記されたい。*

『日本の美術　備前鍛冶』　廣井雄一氏著　　頁四十八

（前略）*福岡一文字の始祖則宗は後鳥羽院番鍛冶の一人として著名な刀工であり、その子助宗も世に知られる刀工である。さらにこの一門に安則・成高があり、助宗の子に助則がいることは文献からも明らかなところであろう。則宗の在銘作は少なく、日枝神社と御物のものが昔から知られている。いずれも一文字の中では最も品格が高く、小丁子の刃文を見事に焼く。日枝神社の則宗の銘は細鏨、御物はやや太鏨であり、同作には大別この二種の銘が見られる。*（後略）

先行研究を整理すると、同じ備前の地で一文字派に先立って活躍した古備前派の作と類似する点が多いが、丁子刃や映りが見られやや技巧的になるきらいがあること、それでも後の一文字（福岡一文字など）と比べると地味な作風であることなどがわかる。一方で、作風比較の前提となる現存作の範囲

が非常に曖昧であることが判明した。基本的に双璧とされる日枝神社の国宝　太刀　銘則宗と、宮内庁所蔵の太刀　銘則宗を疑う向きはないものの、他の作例については『華やかな日本刀　備前一文字』において廣井雄一氏が土屋家旧蔵で現在岡山県立博物館が所蔵する重要文化財　太刀　銘則宗や、島津家旧蔵で現在個人蔵の太刀　銘則宗を正真作として認める旨の言及を行う以外には、国宝、御物とその解説文自体が紹介する作を則宗作例として認めるに留まる事例がほとんどであった。そこで本研究では、まず則宗という刀工と、その作例として扱う範囲の再定義を試みたい。

・刀工・一文字則宗とは

則宗とは、鎌倉時代初期、後鳥羽上皇によって番鍛冶が招集された承元頃に備前国で活躍した刀工である。一文字派の実質的な祖と目される人物で、彼とその周辺の世代である古一文字の後、鎌倉中期に備前国福岡で活躍したことが知られる福岡一文字が隆盛し、その他に吉岡一文字や片山一文字という系統も存在する。近年発見され、現存最古の刀剣書とされている史料、通称「龍造寺本銘尽（めいづくし)」で既に言及があり、それに次ぐ「観智院本銘尽」以降、ほとんどの系統の中世刀剣書に登場する。このことから、則宗は刀工としては最も速くに認知されていた一群の一人であり、その後も刀剣書で取り上げられるだけの知名度を保っていたことがわかる。ただし、吉原弘道氏の研究によれば「龍造寺本銘尽」の内容の成立は鎌倉時代後期から末期、現存する写本は 1351 年に書写されたもので、則宗との間には大きな年代の開きがある。現存 2 番目に古い「観智院本銘尽」も、内容が鎌倉時代末期のもので、現存する写本は 1423 年書写である。この事実から筆者としては、則宗に限らず鎌倉中期までの刀工ほぼ全てに言えることであるが、彼等の系譜や流派観について現在語られている内容について事実とは異なる可能性が常につきまとい、現在伝わっている各刀工の位置づけについてどこまでが首肯されうるものか、作風整理と比較を行う中で地道に確認すべきことをここで改めて主調する。

・則宗作例の範囲

現存作例の相互比較による作風の抽出を試みるにあたり、前述の前提のもと、これまで則宗による制作と見なされてきたものとそうでないものを問わず、則宗作例の範囲を再定義する必要があると考え、「則宗の銘をもつ、もしくは則宗作として長く伝来している」ことを条件として作例を捜索した結果、管見の限り以下の 9 口が確認できた。

・国宝　太刀　銘則宗　　（日枝神社所蔵）

・御物　太刀　銘則宗　　（宮内庁所蔵）

・重文　太刀　銘則宗　　（岡山県立博物館所蔵）

・重文　太刀　銘則宗　　（三井記念美術館所蔵）

・重文　刀　　無銘（伝則宗）　　（忌宮神社所蔵）

・　　太刀　銘□前国則宗　　（愛宕神社所蔵、京都国立博物館へ寄託中）

・　　太刀　銘則宗　　（個人蔵）

・　　太刀　銘則宗　一　　（佐野美術館所蔵）

・　　太刀　銘則宗作　　（徳川美術館所蔵）

これらについて作風の相互比較を行い、則宗という刀工のもつ作風についての考察を試みる。なお、筆者が実見済みであるのは、日枝神社、岡山県立博物館、忌宮神社所蔵の３口のみである。また検討を行った項目は以下の通りであるが、作例によっては後世に改変を受けており評価基準全ての比較には供することのできないものが含まれている。

姿：反りの様子、身幅の大小、元先の身幅の差、鋒の様子、茎の様子、銘、刀身彫刻

地：地色、肌目、地沸、映り

刃：刃の出来、刃紋の種類、刃幅の広さ、刃縁の冴え、帽子の様子、刃中の働き

・比較の結果と指摘

まず、検討項目の中でも、特に示唆的と思われる特徴が見出せた項目について紹介する。

①反りの様子　藤末鎌初の刀剣の反りとしては、腰から中程にかけての広範囲が反りの中心となる事が多い。一方、物打辺から反りが浅くなっており、ほぼ無反りもしくは伏さる点は時代の特徴に沿っている。

②元先での身幅の差　伝世中の研ぎ減りに関しての問題はあるものの、計測数値が参照でき、区送り（刃の部分の寸法の改変）が認められないものについては、3 作例（日枝神社所蔵、御物、愛宕神社所蔵の３口）で共に元幅が先幅の約 1.6 倍と揃っている。

③銘　鏨の太さはまちまちだが、佩表の区から少し下、目釘孔のすぐ上辺りの棟側に寄せて二字銘を切る作例が多く、鎬筋に字の左側が軽くかかる程度の控えめなものがほとんどである。

④地色　青紫がかる場合が多い。(写真での観察が多く、現時点では信頼性に欠ける。今後実見を進めて検証したい。)

⑤肌目　軽く肌立つ小板目肌、もしくは小板目肌杢目交じりがほとんどである。日枝神社所蔵品と御物はほとんど肌の立たない非常に詰んだ肌をしているが、この相違は突発的な出来の良さと解釈しうる範疇である。

⑥刃文の種類　直刃調もしくはゆるやかな湾れ（のたれ）調に、小丁子刃もしくは丁子足主体の小

乱れ刃であることが多い。

⑦帽子の様子　直に入って小丸であることがほとんどで、僅かに乱れ込んだり掃きかけたりといった乱れがある。

その他の項目に関するものも含めて、検討から得られた成果を整理する。まず、基本的な作風については「姿は細身、小鋒で腰反り高く踏張りがあり、鍛えは小板目がつみ、地沸つき、地斑交じり、乱映りが立つ。刃文は直刃調に小丁子を主に小乱交じり、小沸がついて見事」との広井氏の指摘が的を射ているものの、腰反りと片付けるにはやや反りの中心が中程に寄っていること、元先の身幅が 1.6：1 程度の比率であること、青紫がかる地金をしている場合があること、帽子は直に小丸が僅かに乱れる傾向にあることを加えて指摘したい。また、項目ごとに各作例に共通して見られる特徴を、日枝神社所蔵品と御物が特に多く備えており、それに次いで多いのが岡山県立博物館所蔵品、愛宕神社所蔵品、個人蔵の 3 口であった。日枝神社所蔵品と御物は、他の作例から地金や刃の出来映えの点で突出しており、これらが本来の則宗の作域というよりは、突発的に現れた優品として捉えられるべきである。確たる原因は不明だが、藤末鎌初の刀工には普段の力量から大きく離れる名品を残す事例がまま見られる。則宗と同じ備前では、古備前派の包平にとっての太刀　銘備前国包平作（名物大包平）などが知られるところである。日枝神社所蔵品と御物の 2 口と他の則宗作例について、これほどの開きは認められないが、これまで則宗作例の境界が不明瞭かつ真作と認められる作品が少なかった原因の一つに、先行研究が則宗の作風をこの優品 2 口を中心に考えてきたことがあった可能性を指摘したい。加えて、銘を切る鏨の太さや全体の寸法、茎の形状など特定の傾向が見られない項目や、1，2 作例のみが特異な作風を見せる項目が少なくなく、則宗という刀工の作域にはやや幅があるようである。これらについては、則宗の中での年代による作風変化、注文主の意向、もしくは現存作における残存の偏りなどの原因が考えられるが、今回はその精査には至らなかった。今後他の刀工との比較を含めて検討することとしたい。

また、作風整理を行ううちに重要文化財　刀　無銘（伝則宗）（忌宮神社所蔵）及び、太刀　銘則宗作（徳川美術館所蔵）の二作例について、則宗作例でない可能性があるとの考えに至った。2 作例共に多くの点で他の 7 口と異なるが、則宗の作ではないとの考えに至った理由は、この 2 口にはより年代が下ってから登場するとされる、頭の高低差が大きな激しい乱れ刃が焼かれていることである。先述の通り則宗の作風には幅が見られるが、年代の異なる作風が看取されることはその範囲としても解釈しがたい。

・忌宮神社所蔵作例に関して

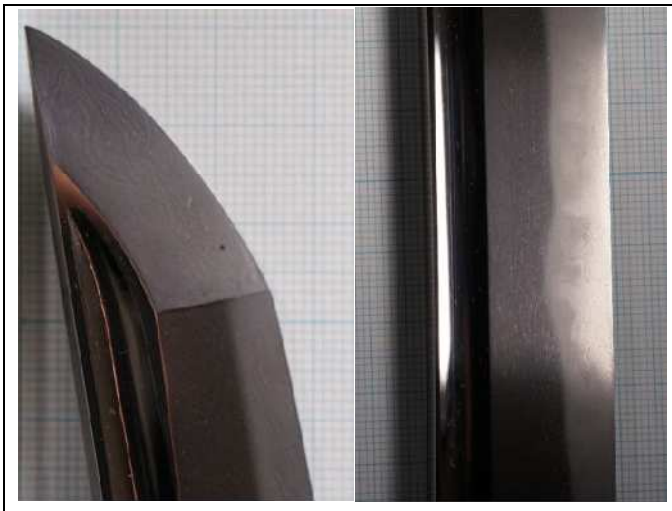
先述の通り、今回の自主研究において忌宮神社様より忌宮神社所蔵　刀　無銘（伝則宗）（以下、本作例と呼称する）の特別拝観の機会をいただいたため、その調査成果の報告を行う。同時に、本作例が則宗の作例ではない考えに至ったため、その作者の特定に向けて特徴的な作風を整理、それを備えている作例がみられる刀工や流派を捜索した。

〇調査成果

造り込みは鎬造、庵棟。法量は以下の通りである。

刃長 72.2　茎長 18.5　鋒長 3.11　反り 2.6　元幅 2.98　先幅 2.1

保存状態としては、茎が大きく磨上られているものの、現在の目釘孔の内、茎尻側の 2 つのどちらかが当初の孔である可能性があり、刃長や反りから考えても大磨上なのではなく元来無銘の作例だった可能性が高い。表面に軽い錆びが出るものの研ぎ減りはほとんど見られず、地刃共に健全な印象である。



←特徴的な帽子と刃中の働き

〇制作者の想定

本作例が則宗による制作ではない可能性が高いとの指摘を行ったが、これに本作が単なる贋作であるとする意図はなく、ある時点、恐らくは毛利元敏（1849～1908）による奉納以前、元禄５年（1692）の本阿弥光常による代付けもしくはそれ以前の段階に誤りがあり、以降そのまま伝来したという事情によるものであると筆者は考えている。すなわち、正しい位置づけが行われれば、則宗とは別の刀工の代表作として評価される可能性もあるということである。本作例において特に特徴的な作風を示しているのは以下の４点である。

① 房状にはならないが、高低差のある丁子刃である
② 備前伝風の刃の出来であるが、一方で映りが一切看取できない
③ 刃の全体に複雑な刃中の働きが見られる
④ 帽子の刃幅が鋒のほとんど全てを占めるほどに広い

①は古一文字派と、その後主流となる福岡一文字派の吉房などの系統の中間的な作風のように思われるが、具体的に過渡期の刀工にこれと類似する刃が認められるわけではない。②に関しては、映りの発展する前の古備前派において、刃が備前伝の作風を示しながらも映りが認められないものがまま存在する。しかし年代のより下る時期に開発された刃文と思われるものが認められることから、その中に限定することは尚早かと考える。また③、④については、日本刀としてかなり異色の作風であり、作者特定の手がかりとして有用であると考えている。しかしながら、現段階での筆者の知見では①～④の特徴を全て備える刀工を探し出すことは叶わなかった。そのため現時点での断定は控え、可能性の提示を行うに留めることとしたい。具体的には以下の刀工、系統などに部分的な類似を発見した。

・古備前助村

平安時代の古備前派の刀工の一人。④に近い特徴の作例があり、映りも立たない。②に比較的近い丁子刃を焼く。

・片山一文字則房

一文字派は後に複数の分派が発生する。そのうち一つに片山一文字と称される一群があり、則房はそのうちの一人である。同名工が数代続いた内に、地金が冴えて映りが立たないものを打つ代があり、②に近似した作風を示す刃を焼く代もある。

・相伝備前の諸刀工

刃中の働きが強いことに定評のある相州伝の影響を受けた室町後期の備前伝に①、②、④と近い作風のものがまま見受けられる。しかし、忌宮神社の作例の刃が匂出来であることと相違している。

【参考文献】

図録
『華やかな日本刀備前一文字』(佐野美術館,林原美術館,大倉集古館,徳川美術館,2007).
『備前刀剣王国』(佐野美術館,刀剣博物館,2015)
『平成二十九年度特別展　備前刀―日本刀の王者―』(岡山県立博物館,2017)
『京のかたな　匠のわざと雅のこころ』(京都国立博物館,2018)
『徳川美術館所蔵　刀剣・刀装具』(徳川美術館,2018)
『日本刀　鑑賞のしおり　佐野美術館蔵品シリーズ５』(佐野美術館,2022)
図書
本間順治『日本古刀史』(財団法人日本美術刀剣保存協会,1958）.
本間順治,佐藤貫一監修代表『日本刀大観 古刀篇一』第四回配本(大塚巧藝社,1968).
本間順治,佐藤貫一監修代表『日本刀大観 古刀篇二』第三回配本(大塚巧藝社,1967).
本間順治,佐藤貫一監修代表『日本刀大観 古刀篇三』第五回配本(大塚巧藝社,1969).
広井雄一篇『日本の美術　第７３号備前鍛冶』(至文堂,1972).
永山光幹『刀剣鑑定読本（新版)』(永山美術刀剣研磨所,1995).
本間順治監修,佐藤寒山編著『別冊歴史読本歴史図鑑シリーズ〉　日本名刀大図鑑』(新人物往来社,1996).
辻本直男『図説　刀剣名物帳〈縮刷版〉』(雄山閣,2023).
論文・報告書
吉原弘道「重要文化財「銘尽（観智院本)」の復元とその性格―中世刀剣書の祖型をめぐって―」『九州産業大学基礎教育センター研究紀要』第一号(2011).
吉原弘道「「銘尽（観智院本)」の収録刀工（一)」『九州産業大学基礎教育センター研究紀要』第四号(2014).
吉原弘道「「銘尽（観智院本)」の収録刀工（二)」『九州産業大学基礎教育センター研究紀要』第五号(2015).
吉原弘道「「銘尽（龍造寺本)」から見える中世刀剣書の成立とその受容―申状土代の裏に書写された現存最古の刀剣書―」『古文書研究』第八十四号(2018).
吉原弘道「「銘尽（龍造寺本)」の復元と収録刀工」、『九州産業大学基礎教育センター研究紀要』第九号(2019).
吉原弘道「平安～室町時代における刀鍛冶の基礎的研究―中世刀剣所を中心とした刀工一覧（稿)」平成二十四年度～平成二十六年度科学研究費補助金　基盤研究（Ｃ）研究報告書（二六三七〇一四七）「平安～鎌倉時代における刀鍛冶の基礎的研究―刀鍛冶データベースの構築―」・平成二十七年度～令和四年度科学研究費補助金　基盤研究（Ｃ）研究報告書　（一七Ｋ〇二三三四)「室町～戦国時代における日本刀の贈答と在銘刀剣の美術的評価に関する基礎的研究」(2023).